
第6章

成 果 と 課 題

第6章 成果と課題

本研究事業が開発したモデルカリキュラムの特徴は、自己課題探究型カリキュラムを実現させるために、教育実践を省察する観点として評価スタンダードを開発し、PDCAサイクルによって具体的な研修プログラムの評価と改善を促すために、研修の内容を作業課題としてとらえ直し、この作業課題の達成状況を明示した評価基準を開発したことである。また、勤務校で実施される課業期間中研修におけるサポートの可能性や研修終了後のサポートの可能性を模索した。このような研究事業の成果として、次のことが明らかになった。

第一に、評価スタンダードの開発によって、教師の専門性を高めていく上でのガイドラインを提供することが可能になった。この評価スタンダードによって、受講者は、研修の開始時と終了時と、さらに、その一年後に総括的な自己省察を行うことが可能になった。

第二に、評価スタンダードに基づいて研修内容を意味づけることによって、知識の獲得を目的とした講義と知識の応用を目的とした演習等の必要性和関連が明確になった。研修を構想した講師の方々も、聞き取り調査によって研修の目的と内容、方法を再度確認し、具体的な作業課題を意識することによって、効果的な研修を展開することができるようになった。

第三に、評価スタンダードに基づいて、演習等を作業課題としてとらえ直すことによって、その達成度を明らかにした評価基準の開発が可能になり、PDCAサイクルを具体的に実現させることが明らかになった。

第四に、作業課題に基づいた評価基準を提供することによって、研修に参加した受講者が自分自身の達成度を自己省察することが可能になり、今後の課題を明確に意識することが可能になった。ここでは、評価基準は、シンプルな記述にして一般に広く利用可能なものにするべきか、あるいは、講師が意図した研修内容を反映した具体的個別的なものにするべきか、ということに関してワーキンググループの中では議論になった。最終的に、我々は、評価スタンダードは、一般的、包括的で共有可能なもの、一方の作業課題とこれに基づいた評価基準は具体的、個別的なもの、として考えていくことにした。また、評価スタンダードや評価基準は、点検や検査のために活用されるようなシンプルなものではなく、自己省察という反省的な思考を促すガイドラインとして開発するために活用されるものであるから、含蓄のある論理的な記述にすることにした。

第五に、一連の研究事業の成果は、免許更新研修においても、適正な計画のガイドラインと説明責任のある評価モデルを提供する可能性がある。ここで開発した評価基準は、S、A、Bという三つのランキングで表示したが、これらにいたらないランキングがCに相当し、これは不合格ということになる。

第六に、課業期間中研修のサポートは、10年経験者研修から派生して、教科等の研究発表や研究授業を依頼されている受講生にサポートし、その経緯を支障のない範囲内でウェブ上に紹介していく方法が、最も実現可能性が高いことが明らかになった。

今後の課題としては、研修プログラムの中核となる作業課題の開発方法と評価基準の設定方法に関して、理論的な検討とPDCAサイクルの中での反省的な検討を、さらに推進していく必要が

ある。そのためには、今回、基礎理論としてよりどころとしたアメリカ合衆国のG. ウィギンズらの評価理論をさらに吟味する必要がある。特に、研修の本質的内容を反映した作業課題を開発する方法は、今後も慎重に考えていきたい。

(長島 真人)